

## 日本の金属業祭祀における神道と中国文化

— 鞆祭りを中心に —

劉 琳 琳

LIU Linlin

北京大学日語系 准教授

【要旨】本稿は日本の金属業の祭祀の代表例——<sup>ふいご</sup>鞆祭りの形成過程に関わるいくつかの文化要素を考察してみた。鞆祭りの神話的基礎は中世の小鍛冶神話であり、小鍛冶宗近の宝剣作りを稲荷神が助けるというストーリーに、稲荷神が金属業の守護神であるという意識が含まれており、この意識はのちに京都の鍛冶職人をはじめとする金属業界において広まった。一方、鞆祭りの儀礼面の基礎となすのは京都で広く行われた冬の火焼行事と考えられる。一条兼冬の『世諺問答』の記述の分析を通して、火焼の源流は宮中の鎮魂祭御神樂およびその一環としての「庭燎」に遡ることが明らかである。鎮魂祭の深層にはもともと天岩戸神話があり、鎮魂祭は冬至に際して太陽のよみがえりを祈るという意識が含まれることになる。火焼・鞆祭りの成立に伴って、そうした意識もこの二つの行事に流れ込んだと考えられよう。さらに、室町時代以降、中国哲学の一端である一陽来復説が、火焼・鞆祭りの成立の観念面の根拠と見なされるようになった。一方、丙午と五月五日を吉日とする中国冶金業の吉日意識は日本にも伝わったが、ついに中近世の金属業に受け入れられた形跡が見つからず、日本における影響は限定的だと言わざるをえない。一陽来復説が鞆祭りに流れ込んだことによって、金属生産の営みが宇宙の運行とつながる形で捉えられ、暗黒や困難を乗り越え、希望をいつまでも持ち続けていくという前向きな価値観が金属業に結びつくようになった。鞆祭りは一見ごく単純な金属業の祭祀であるが、そのなかに人々の素朴な心理や神話・儀礼・哲学・技術という様々な側面が含まれ、多彩な国際文化交流および選別の結実として生まれたという、興味深い祭りである。

キーワード 鞆祭り、金属業祭祀、神道、火焼、「小鍛冶」

A study of Shinto religion and Chinese culture  
in rituals of Japanese metallurgical industrial  
— focusing on the Bellows Festival —

**Abstract :** This research discusses some cultural elements which relate to the formation of the Bellows Festival of the metal industry in Japan. The mythical basis of this festival is a myth called 'Kokaji' (the swordsmith), which happened in the medieval Japan. In the story of Inari God helping a swordsmith whose name was 'Munechika' to make a treasured sword, the Inari God was regarded as the guardian angel of the metal industry. This point of view was widely spread among the blacksmiths who were in the metal industry in Kyoto soon. On the other hand, people believe that the basic ritual of this festival is a fire burning event called 'Hitaki', which was

widely held in the winter of Kyoto. By the description of the 'Segen Mondo' of Ichijo Kanehuyu, it is clear that the origin of the 'Hitaki' could date back to the 'Mikagura of Tinkonsai'(a formal dancing ritual performed on the Requiem Festival ) and the 'Niwabi'(the Bonfire) in the Imperial Palace. The basis of 'Chinkonsai'(the Requiem Festival) originally related to the myth of Amano-Iwato and the purpose of this festival is to pray for the return of the sun on Winter Solstice. With the establishment of 'Hitaki' and the Bellows Festival, this kind of view had become an essential part of them. In addition, after the Muromachi period, the theory of 'Yi Yang Lai Fu'(the return of spring), a part of Chinese philosophy, was regarded as the theoretical basis of the 'Hitaki' and the Bellows Festival. On the other hand, though the concept of the 'lucky day' in Chinese metallurgy industry was introduced to Japan, it seems that people in the Middle Ages of Japan did not accept this concept. Thus, we can say that the influence of this concept was limited in Japan. As the theory of 'Yi Yang Lai Fu' becoming an essential part of the Bellows Festival, the metal production was closely bound up with the running of the universe, which encouraged people to overcome the darkness and difficulties and to never lose their hope. The Bellows Festival is not only a festival about metal industry , but also an important festival which contains various aspects about psychology, myths, rituals, philosophy and technology. Moreover, it is a result of international cultural exchange and cultural selection.

Keywords: The Bellows Festival, rituals of metallurgical industrial, Shinto religion, Hitaki, Kokaji (the swordsmith)

## はじめに：鞴祭りの概観と先行研究

本稿で取り上げる鞴祭りの「鞴」とは、箱型の送風装置であり、前近代において、金属関連の職業や火を使うその他の業種、むろん家庭でも広く使われていたものであった。本稿の着目点はそもそも日本の金属文化の考察であることから、鞴祭りを主に金属関連の職業の祭祀論として考察していきたい。

日本の古代から中世へかけて、農業における鉄製農具への需要や、さらに武家社会の戦争によって、兵器への需要も長く続いていたことを受けて、冶金や金属器製造業も次第に成長を遂げ、金属生産にまつわる伝説や儀礼も徐々に現れてきた。そして、金属業の本格的な祭祀——鞴祭りはおよそ中世末から近世初頭にかけての時期に誕生したと思われる。

鞴は歴史上、「吹皮」または「吹革」という漢字を当てられていたのは、木製の箱型の鞴が出現する前の送風用具が、動物の皮で作られていたからである。また、中国古代の「橐籥」という言葉で表記されていた場合もある。文献でも、鞴祭りは「吹革祭」・「吹皮祭」・「橐籥祭」と複数の表記が見られている。近世の鞴祭りは総じて、旧暦11月8日に行われていたが、明治政府が西暦を採用してから、近代以降の鞴祭りは西暦11月8日に変更された。江戸時代までの鞴祭りは、日本全国で広く見られる民俗的な慣行であり、黒田迪子の統計によれば、北海道以外のすべての地域に鞴祭りの風習があるとされている（黒田2015：32-33）。

鞴祭りに関する先行研究は意外と少なく、主なものとして上記で取り上げた黒田迪子と寺島慶一の論考が見られる。黒田（2015）は、祭日・祭神・供物と三つの面に整理し、民俗の変遷論と伝承論の視点からそれぞれの面を論じた。特に、鞴祭りにおける一陽来復の意識と蜜柑の奉納との関わりが



写真：島根県安来市和鋼博物館に展示された天秤 出典：筆者撮影

明らかにされた。寺島（2001）は、韃祭りは「古来のお火焼神事に火を重んずる鍛冶職・鋳物師たちの稲荷信仰を取り込んで大きな行事にまとめられ、変容した」ものと見なし、その習合が形成された時期を17世紀中期としている。この寺島の論文は、絵画を含み、たくさんの史料を提示しており、非常に興味深い論考である。

筆者は前述した先学に学びながら、韃祭り関連の資料を整理しているうちに、当該祭祀にはいくつもの信仰や儀礼の要素が交錯していることに気が付いた。主に小鍛冶神話や韃の起源神話、京都で誕生した「火焼<sup>ひたき</sup>」という行事が挙げられ、特に火焼から天岩戸神話や皇室の鎮魂祭までに遡ることができ、中国伝来の一陽来復説の影響も受けていることがうかがわれる。韃祭りに含まれる雑多の文化現象は、概ね日本土着の神話一儀式と中国思想の二つの文化系統に整理することができる。本稿では、これらの異なる系統に属する文化要素は、韃祭りの生成にどのような形で関与し、各要素の間にどのような関わり合いがあるのかを究明することを目的としたい。

## I 韃祭りの神観念の根源：「小鍛冶」神話

まず、稲荷神の金属業守護神としての性格については、周知のごとく、稲荷大社の性格は古い段階では農業の守護神であり、近世以降に商業の守護神という性格が生じた。一方、韃祭りは、金属業をはじめとした韃と火を使う職業の祭祀のことを指す。ここから、農業の神としての神社は、金属業の祭祀との関連性があるといえるのではないだろうか。吉野裕や近藤喜博によれば、稲荷神は元来より金属職能の神の性格を有しているとされる（吉野 1971；近藤 1963）。

稲荷神が持つ金属の性格の発生に着目すると、京都の金属業の人々の稲荷信仰が浮上してくる。史料で示されるところから見て、京都の金属業分野、とりわけ刀剣業者の間で稲荷信仰が顕著となるのは中世からであると推測できるだろう。そして、稲荷神が金属業の守り神だという知識が、社会的に通用するようになったのは中世であり、そのきっかけは「小鍛冶」という伝説の流通であると考えられる。以上が近世以来社会で広く見られる説である。「小鍛冶」という言葉の本来の意味は、金属器を作る職人で、とりわけ刀を鍛造する人のことを指す。平安時代中期の有名な刀工である三条宗近は、

「三条小鍛冶宗近」とも呼ばれ、「小鍛冶」はむしろ刀鍛冶という職種よりも宗近本人やその流派の通称として使われていることが多い。宗近が稲荷神に助けられて宝剣二振りを作られた話は日本で広く知られており、その理由の一つとして、室町時代に能の形で上演されており、現代でも「小鍛冶」という耳なじみのある能の演目がある。次に、能「小鍛冶」の詞章を踏まえて、その大筋を述べていく。

一条天皇がある日、宗近に宝剣二振りを作ることを命じた。しかし宗近には助手がいないため責務を果たせないと思い、大変憂慮していた。「宣旨畏つて承り候。さやうの御剣を仕るべきには。われに劣らぬもの相鎚を仕りてこそ。御剣も成就候ふべけれ。これはとかくの御返事を。申しかねたるばかりなり。」宗近は稲荷神の助けを求めるために、稲荷神社へ参拝したら、見知らぬ童子が現れて、漢の劉邦の三尺の剣、唐の鐘馗の剣、日本のヤマトタケルの草薙剣など、名剣の靈験を語り、宗近を励ました。宗近はさっそく鍛冶の壇を築き、宝剣作りに取り掛かる。その時、稲荷神が現れて、宗近の助手役をつとめてくれた。謡曲のなかで次のように描かれている。

<地>「童男壇の上にあがつて。宗近に三拝の、膝を屈し、さて剣の、鉄はと問へば、宗近も恐悦の、心を先として、鉄取り出だし、教の槌を、はったと打てば。」

<シテ>「ちょうど打つ、」

<地>「ちょうちょうど、打ち重ねたる、槌の響き、天地に聞こえて、夥<sup>おびた</sup>しや。」(横道万里雄・<sup>(1)</sup>表章 1972 : 368-369)

そうして宗近は神の助けのもと、遂に宝剣二振りを作るのを実現した。

謡曲「小鍛冶」では宗近が勅命を受けて憂慮していた様子や中国と日本の名剣の威徳譚、稲荷神が剣作りを手伝う様子など、格調高い詞章で精緻に描かれている。この作品のストーリーは「稲荷神が宗近の宝剣作りを助けた」とまとめることができる。本稿でこの伝説をわざわざ神話と呼ぶのは、ストーリーで語られているのが、記紀神話のような神の事跡や行動、経験などと本質的に同じであると考えているからである。また、能としての「小鍛冶」の上演時期は、1537年にまで遡ることができる(石井 2002)。能は洗練された芸術手法を取り入れた総合的な舞台芸術であることを踏まえると、舞台芸術に先立って、比較的素朴な文字や口承文学の形の「小鍛冶」があったことが想定される。現在、確認されているさらに早い時期の「小鍛冶」テキストは、「和州布留大明神御縁記」の一節であり、この資料はおそらく最初に寺島によって発見されたかもしれないが、以下、「小鍛冶」につながる部分を掲げる。

「加之、人皇七十二代白河院御宇、山城国長池云所有大蛇、惱上下往還之旅人、絶南北二京之通路、斯言達叡聞、帝大奉驚、遣博士卜之、博士奏曰、詔倭州布留大明神、奉加神力必可止斯愁云云、依之詔巫、々承宣旨、捧幣帛。祈周故、数日之後死蛇浮池水、是併、金輪懇祈之所致、明神冥応之令然所也、爰以彌致報賽、奉発信心給、即、枉宝輦於此神祠、種々靈宝有御寄附、其内先有小狐太刀、此御剣、三条小鍛冶與稲荷大明神打而、奉天子御剣也、長二尺七寸、有藤英、有<sup>三</sup>字、浦又有狐、依之名小狐、即、奉安置之宝殿矣、  
(後略)

布留社人

左近

文安三丙寅年二月

大方出羽守殿」(寺島 2001；上田・佐伯<sup>(2)</sup> 1989)

このテキストのなかで、白河天皇が布留大明神へ捧げた宝物の中に「小狐太刀」が見られ、それは宗近が稲荷大明神とともに作ったものである。また、剣の長さや形の特徴も記されており、剣の裏面に狐(狐の模様かそれとも「狐」という文字かは判然としないが)が彫刻されていることから稲荷神との関わりをうかがうことができるだろう。のちの「小鍛冶」謡曲と比べれば、この「宗近の宝剣作り」のストーリーは簡略的で、「事件」発生の時間や原因については何も示されておらず、宗近の困惑した様子や、稲荷神が童子に変身して助言する場面などの描写も見られない。また、どの天皇の命令で剣を作ったのかも不明であり、小鍛冶のストーリーの構成としては、素朴な形式であるといえよう。ここからみれば、小鍛冶神話は遅くとも 1446 年(文安 3 年)以前には、すでに言い伝えの形で存在していたと推定できよう。

小鍛冶神話が伝えようとする「意味」は、おそらく神の守護や霊験であろう。宗近が難しい課題を命じられたとき、神に助けを求めることの重要性にいち早く気づき、一方の稲荷神は童子に変身して、宗近に助言し、のちに自ら宗近の宝剣作りの仕事にも加わる。これらの叙述からは、職人を温かく守護する神の姿が鮮明に描き出されている。一方、職業神または職能神という信仰現象の生成は、その基本的な動因として職業従事者たちの心理——職業の順調を願うことが挙げられよう。すなわち、小鍛冶神話が伝えた「神の守護」という意味は、金属業の人々における生産の順調や商売繁盛の心理に応えることができるのだ。神が現れて刀工の剣作りを助けるというのは言うまでもなく想像上の「出来事」であるが、この物語の生成・流通をきっかけに、もともと備わっていたと見られる稲荷神の金属の性格は、よりいっそう突出するようになり、稲荷の形での金属の信仰—儀式複合に生成の土壌を提供したと思われる。稲荷大社の周辺に金属業の神社として花山稲荷神社や合槌稲荷神社が設立されたのは、その動向の現れといえよう。

金属を司る稲荷神の性格は小鍛冶神話のみならず、もう一つの金属業神話をも生み出した。それは、「稲荷神が韃を持って天下りした」という神話である。管見の限り、この神話の記述された最初のテキストは、1685 年に刊行された坂内直頼『本朝諸社一覧』の「稲荷」条である。

「当社鍛冶を始メ一切ノ金物師信仰シテ十一月八日韃囊(ファイガウ)祭トテ此神ヲ祭奉ル事ハ当山御垂跡ノ時天上ヨリ韃囊ト云フ物ヲ持下リ玉フ故也トイヘリ。是俗説ノ誤也。」(続きは小鍛冶の物語が記されている。)(坂内直頼 1673)

また、1690 年(元禄 3 年) 6 月出版の『人倫訓蒙図彙』には次のように紹介されている。

「ふいごは京童の説に、稲荷の御神天上より持来(ぢらい)し給ふとかや。鍛冶を初<sup>はじめ</sup>一切の鉄物師、是を用ゆ。」(朝倉治彦 1990 : 205)

このほかにも、さらに細かくストーリーを語った言い伝えがあり、その例として、「鞆は十一月八日（つまり鞆祭りの当日）の卯刻に天下った」というものがある。この説はおそらく11月8日に鞆祭りをを行う風習がある程度定着してから、なぜこの日に祭礼を執り行うのかを説明するために案出された起源神話と見てよいだろう。総じていえば、この類型の神話によって稲荷神社と金属業とがより深い結びつきがあることが示されている。

## II 鞆祭りの儀礼面の起源：火焼行事

『日本国語大辞典』によれば、「おひたき」とは、「十一月八日に京都を中心に行なわれた神事」とされ、接頭語「お」を省略して単に「ひたき」と呼ぶ場合もあり、当て字として「火焼」と「火焚」の二通りある。ほかに「ひたけ」・「ほたき」・「ほたけ」と多様な呼び方がある。近世の史料には漢字の「火焼」と仮名の「ひたき」が最も多く登場していることから、本稿では用語の混乱を避けるために、読みの「ひたき」と漢字表記の「火焼」に統一する<sup>(3)</sup>。また、近代の研究では、どちらかといえば、鞆祭りよりも火焼を取り上げる研究者の方が、明らかに多く見られる。比較的早い時期に、両者の関連性を指摘したのはおそらく柳田国男であり、火焼は「極陰の月」に火をもって陽気を助ける意識を表すという説を提起している。「たとへば霜月の八日は吹革祭として金屋の徒が守って居たのも、多分は御火焼との関係であらうと思ふ。即この月は所謂極陰の陽を発すべき月である故、特に人間の火を以て少しでも早くこれを促さうとする慣習が、期せずして多くの民族の間に始まったのであるが、(後略)」(柳田 1969: 287)としている。

柳田は、極陰の月の火焼は陰陽思想と何らかの関わりがあると解釈しており、そして、室町時代の公卿一条兼冬の年中行事書『世諺問答』に触れていた。兼冬はその十一月の条で京都の神社の火焼は宮中の内侍所御神楽の庭火に起源すると主張し、この説はのちに広範囲に広まり、近世の年中行事書にもたびたび引用されている。近代以降、北野博美が新説を打ち出し、火焼は内侍所御神楽よりさらに古い鎮魂祭御神楽の庭火から派生したものとしていた(北野 1928: 21)。本稿では、この鎮魂祭起源説を支持する。つまり、鎮魂祭の庭火は鞆祭りに含まれる文化要素の一つと見なすべきであり、鞆祭りは歴史上の神道祭祀(および神話)を吸収したうえで形成されたものといえよう。一方、近世の火焼・鞆祭りに関する年中行事書などでは、「一陽来復」や「陽気の始めて生まれる月」などの表現が見られる。これは中国の陰陽の時間意識に基づいた慣用語である。次に、この点に注目し、近世における中国の陰陽思想と鞆祭りの結びつき方について考察を行う。また、同じ鞆祭りにおいて、陰陽思想と鎮魂祭御神楽にもともと含まれていた神話的な要素との関係の解明をも試みる。

まず、鞆祭りと稲荷神社の火焼との習合を跡付けた寺島慶一の研究を紹介したい。彼が発見した稲荷火焼の史料上の出現は1532年にまで遡り、室町末期の貴族九条植通の『植通公記』天文元年霜月八日条に次のように記されている。「九品寺如例来、次不断光院子祭アリ、次稲荷火焼如例、次子祭アリ」(寺島 2001)。寺島の発見によれば、稲荷社の火焼は1532年以前に遡ることができる。寺島は金属業祭祀としての鞆祭りは17世紀前半に成立したと考え、「ふいご祭りは鍛冶屋が稲荷神へ鎮護を祈る祭であると位置づけることができ、その成立も17世紀前半時期に求めたい」と主張している。さらに、「鞆祭とお火焼は17世紀中期の後半に結びついた」としている(寺島 2001)。一方、鞆祭

りに関する記述の最も早い例は、管見の限り、1638年出版の俳諧書『毛吹草』の霜月条で、霜月の風物として「韋囊（フイガフ）祭 八日」が挙げられる（松江重頼 1971：66）。以上を踏まえると、韮祭りの出現は遅くとも江戸時代初期を下らないと考えられることから、筆者は寺島の指摘に基本的に賛同すべきだと思われる。

韮祭りと稲荷火焼に関する各時期の史料を整理して、以下のことが明らかになった。

- ① 韮祭りは17世紀初頭から存在していた。
- ② 稲荷の火焼は1532年以前にすでに行われていたこと。

なお、『世諺問答』「神火」条によれば、稲荷の火焼に限らず、他の神社でも火焼が行われたことが分かるが、『看聞日記』の1432年（永享4年）に、御香宮の火焼の記述があり、「今夜御香宮御火焼、有猿楽」と記されている（『看聞日記』永享4年11月12日）。

言い換えれば、稲荷の火焼の史料上の初出よりも100年も前に、御香宮ですでに火焼が行われた事実が記録されている。この点から見れば、おそらく15世紀前期に京都の複数の神社で11月の火焼の風習があり、稲荷の火焼はその中の一つと考えてよいであろう。ただ、あくまで筆者の憶測であるが、室町期前半において、稲荷社の火焼はまだ金属業と結び付いておらず、韮祭りには至らなかったと推測したい。韮祭りと稲荷火焼の同一性を示す資料として、比較的早い段階では、1648年の俳諧書『山之井』が挙げられる。その十一月の部では、韮祭りという項目を立て、「ふいがうまつりとは、八日の日いなりのおほたけにて、かな物の諸職人取わきていはひつつ、あかの飯など奉侍る」（北村季吟 1816）という。『山之井』は、各月の季節感を代表する風景や風物を列挙し、簡単な説明も記載しており、俳諧書でよく見られる体裁である。ここから分かるように、作者の北村季吟は金属祭祀としての韮祭りと稲荷神社の火焼とが同一関係と見なしている。

一方、稲荷の火焼と小鍛冶神話との関連性を指摘する史料もいくつか見られる。その比較的早い例は黒川道祐著『日次紀事』（1676年の序文あり）である。本書は江戸初期の年中行事書のなかで代表的な存在であり、主に京都やその一帯の年中行事が紹介されている。十一月の章に稲荷大社の火焼について、次のように述べられている。

「稲荷神大社火焼。相伝。鍛工三条小鍛冶宗近鑄刀劍時、稲荷神出現、而搗（ウチ）鉄槌、以助鍛鍊力云爾。宗近鍊刀之石盤、今在東山知恩院山門下。銀匠・鍛工等凡設橐籥者悉く祭之。或謂橐籥祭。知恩寺鎮守元賀茂明神也。三十九世満霊和尚。加稲荷神八幡。故今日有稲荷神明神之火焼。」（萩原・山路 1981：116）

以上のように、韮祭りが稲荷大社の火焼と同一行事であり、小鍛冶神話が韮祭りの起源に関わっているのは、近世初頭より社会で流通していた知識であろう。稲荷の火焼が金属祭祀の性格を帯びるようになったのは、稲荷大社が前述した金属業者の信仰を得ていたことが背後にあると思われる。

前にも触れたように、一条兼冬は『世諺問答』で神社の火焼の起源を宮中の内侍所御神楽に求めるといふ説はよく知られているところである。

「問て云。此月御火焼とて神火をたきてまつるは何のゆへにて侍るにや。

答。この事たしかにおこりとは侍らじ。たゞし神楽とて。諸神の前にて。冬かならずし侍ることのはべる。是等をはじめと申べき。大かた神楽と申は。天照大神の岩戸をさしてこもり給ひし時。諸神のいのり申されけるに。天鈿目命<sup>アマノメノミコ</sup>まさきのかづらをかざしとし。ひかげを手すきにしてうたひ舞。庭火をたきしかば。天照太神天の岩戸を出給ひしより。諸神この事をこのみ給。今も内侍所にて行はるゝ神楽の事にて侍るなり。官人の庭火をば焼なり。諸卿近衛のめし人などと所作の人よりあひ。庭火などとして哥うたふも。たよりありおぼえ侍るはいかに。」（塙保己一 1991）

一条兼冬は、神社の火焼と当時執行されていた内侍所神楽とを結び付け、さらに天岩戸神話を両者の根源と考えていた。天岩戸神話に火焼の起源を求めるのは的確な指摘であるが、内侍所御神楽と火焼の関連性の断定は北野博美や神話学者の松村武雄によって否定されている。北野と松村は、宮中の御神楽のなかで、実際に十一月に行っていたことから、火焼のルーツと見るべきなのは、鎮魂祭の御神楽であると指摘している。鎮魂祭およびその一環としての御神楽の歴史は内侍所神楽よりさらに長く、通説では天武天皇期の「招魂」に遡れるという。『日本書紀』天武紀十四年十一月条に「丙寅、(中略)是日、為天皇招魂之」という記事が見られる（小島 1998）。鎮魂祭は、元より皇室の重要な祭祀の一つであり、『養老令』や『延喜式』などによると、旧暦十一月中寅また下寅日が行事の日と規定されていた。神楽の演奏はこの儀礼の一部で、鎮魂祭の夜に行われるという。平安期の社会では、この神楽は天岩戸神話に起源すると考えられていた。『日本書紀』の天岩戸神話で火の登場については、次のように描かれている。

（日本書紀 第七段 本文）「又猿女君遠祖天鈿女命、則手持茅纏之梢、立於天石窟戸之前、巧作俳優。亦以天香山之真坂樹為鬢。以蘿為手纏、而焼火処、覆槽置、顕神明之憑談。」（小島 1998）

天照大神は洞窟に隠れ、神々は太陽の女神に出てきてもらうために、あの手この手を使ったが、「焼火処」は天鈿女命の神がかりに関わる一要素と読み取れる。『古語拾遺』の記載では神々が「拳庭療、巧作俳優、相與歌舞」となっている。鎮魂祭の御神楽には音楽と踊りに先立ってまず庭火を焚くという儀礼のルールがある。庭火は照明の目的でなされたと思われるが、神話のなかの庭火という神聖なしきたりに従うという意味は否定できない。さらに、御神楽で歌われる一連の歌のなかで、最初に歌われたのが庭療歌にほかならないのだ。

一条兼冬の新たな指摘は、宮中の御神楽における庭療は神社の火焼の根源という点であろう。書紀や『古語拾遺』では、庭火はあくまで危機解決のための方法の一つに過ぎず、とりわけ重要なものではない。しかし、兼冬の再解釈では、庭火の要素に太陽のよみがえりを促す役割を新たに付与されることになる。

では、鎮魂祭の御神楽・庭療はどのような経緯で神社における「火焼」へと変身したのだろうか。一条も近代の神話学者もこの点には触れていない。これは神楽の歴史に関わる問題で、庭療を伴う神楽は鎮魂祭を原点として、その後徐々に広まっていき、ほかの時間や場で行うようになった。たとえ

ば、石清水八幡宮の臨時祭はその一例であり、史料上の初見は長保三年（1001年）である（『権記』による）。しかし、その起源は930～940年代の承平・天慶の乱を鎮める祭祀だといわれる。『兵範記』保元三年三月廿二日の条に「主殿官人炬庭燎」（笹川種郎 1936：37）とあり、この神楽も庭燎を焚くことから始まることが分かる。内侍所御神楽は実際、前出した鎮魂祭・石清水臨時祭や賀茂臨時祭の御神楽を踏まえて誕生したものである（藺田・橋本 2004）。このように、鎮魂祭から始まる神楽・庭燎の文化は平安時代を通して、徐々に京の神社へと拡散し、神社の冬の火焼となっていったと見てよいだろう。さらに、本稿の課題である韃祭りとの関係についていえば、諸社のなかで特に稻荷大社は中世から金属業者の信仰対象となったことから、その火焼は金属業者の祭祀と見なされ、韃祭りという別名を付けられるようになった、と考えるのも良いだろう。すなわち、天岩戸神話に潜んでいた太陽のよみがえりを祈る意味も神楽・火焼とともに、最終的に韃祭りに流れ込んだと考えられるのである。

### III 一陽来復説の火焼・韃祭りへの影響

兼冬は神火の条の前に、中国暦法に基づき、十一月に関する知識を示している。

「白虎通に周の世には十一月を正月とす。これを曆家に天正月といふ。殷の世には十二月を正月とす。地正月とす。夏の世には今の正月を正月とす。人正月といへり。十一月は陽はじめて生る月なれば。冬至の日より日かげのながくなると申也。陰陽道の曆数をかんがへて十一月に奉るなり。」（埤保己一 1991）

ここに、「十一月は陽はじめて生る月なり」という中国の季節観が登場してくる。これは陰陽思想に基づく時間意識の一つで、中国古代によく見られる言いまわしであるが、さらに知れ渡った表現として「一陽来復」がある。これは周知のとおり、易学、特に卦気説に含まれる季節観であり、卦気説のなかの「十二消息卦」とは十二の卦で12カ月をそれぞれ表し、陰爻と陽爻の順次増減によって各月の性格や季節的な特徴を表現しようとしている。十二消息卦の特色の一つは、夏暦一月から始まるのではなく、夏暦の十一月すなわち周暦の一月から開始し、その対応の卦はまさに「復卦」である。復卦の卦象を見てわかるように、初爻のみが陽爻でその上の爻はすべて陰爻となっている。自然現象から見て、旧暦十一月には冬至があり、太陽直射点は一番南にあたり、東アジア一帯では一年間の太陽エネルギーの最も少ない時期である。ところが、十一月について、復卦の解釈では、一見確かに最も寒冷で暗い時期であると同時に、陽気が最初に地下で芽生える時期でもある。言い換えれば、宇宙全体は十一月から新しいサイクルの始まりを迎え、最も凌ぎにくい冬の季節こそ、逆説的に未来への希望を抱くべきだという志向性が含まれているのである。「十一月に一陽来復」の説は自然に対する正確な観察に基づいたものであり、哲学的な知恵に富む「知識」といえよう。

一陽来復の知識は遅くとも平安時代に日本に伝わり、官僚や貴族の漢詩で「一陽」は冬の風物を描く決まり文句として用いられていた。例として菅原道真の漢詩を挙げてみる。

「陪寒食宴、雨中即事、各分一字」待來寒食路遙遙、自一陽生百五朝  
「冬至日書懷奉呈田別駕」 礼具誰羞履袜疎、千門共幸一陽舒  
(川口久雄 1966 : 130、149)

兼冬の場合、十一月の特徴を一陽来復説をもって説明し、火焼と内侍所御神楽とのつながりを示しているが、厳密に言えば、一陽来復説と火焼とを単に並列的に捉えて、両者の関わり合いについて必ずしも明白な理解を示していなかった。一陽来復説および陰陽の時間意識を踏まえて火焼を認識する姿勢が確認できるのは17世紀後半に入ってからである。坂内直頼は1674年(延宝2年)刊行の『山城四季物語』では、以下のように論じている。

「当月は諸神の祭の日、其神前にして火を焼、又洛中洛外にては、氏子等火をたきて神事とす、庭火といふ是也。諸の神十月は、出雲国に集給ふとかや、十月は四時極陰のときなれば、神は陽体にてまします故、陽陰に伏するの義を以て、彼国に集会し給ふ、此地又日本極陰の地なり、又十一月は一陽来復の節なれば、もろもろの神出雲国を出で、本土にかへり給なり、火はこれ陽なれば、縁を以てむかふるの義なり。(後略)」(早川純三郎 1936 : 139)

坂内は、十一月の火焼を十月に国中の神々が出雲に赴くという俗信に引き寄せて一つのまとまりとし、陰陽思想という大きな枠組みで捉えている。十二消息卦において、十月は坤卦に対応し、六つの爻はすべて陰爻となっていることから、十月は完全に陰の時期で、陽の要素は消えてしまうとされる。中国古代で、「十月は極陰の月」という知識は、十一月は一陽来復の月という説と同様に広く知られていたものである。十月に神々が出雲へ赴くという日本の俗信については、坂内は、「出雲は極陰の地で、一方、神々は陽を表す存在であることから、神が極陰の出雲に集まることは陽が陰に伏せ、あるいは隠れる」と解釈している。また、十一月は「一陽来復」であるため、神々は出雲より各自の鎮座地に戻ることであり、この陽性的な神々の回帰を迎えるために、人々が火を焚く行為こそが、火焼の由来であると説いている。以上の解釈をみれば、中国の陰陽思想、特に一陽来復説は近世の人々が火焼を理解する際の知的根拠となっていたことが分かってくる。前述のように、稻荷の火焼と韃祭りとは近世初頭の時点でほぼ同一事物と見なされていたことから、一陽来復説はおのずから韃祭りを理解するための背景となり、これによって金属業祭祀に陰陽思想の要素が取り入れられるようになった。このように、陰陽思想の介入により、韃祭りに見られる金属製造という技術的要素は広大な宇宙時間と結びつくようになる。

#### IV 丙午：火の文化の選別

以上では韃祭りに含まれた諸要素および互いの関係を分析してきたが、次に、視点を変えて、韃祭りに見られない文化について考えてみたい。中日古代の金属生産文化の違いを考えると、気づいた点がある。すなわち、中国の冶金吉日としての「丙午」観念は日本の金属業に定着しなかったことである。

一陽来復説は陰陽思想を介して稲荷の火焼と金属業祭祀を関連付けるきっかけとなる。一方、中国では早い時期から、五行思想を踏まえて冶金における火の性格を考える傾向がある。金属器作りを含め冶金に必要な技術はもちろん非常に複雑なものであるが、火の使用は大変肝要な一環を占めているのがいうまでもない。鉱石や金属を溶かす火の能力について、古代中国人は五行の「相克」パターンで理解し、すなわち「火剋金」という言いまわしがある。また、五行と干支との対応関係により、火に配当される丙午が注目されていた。さらに、五行と四季との対応関係のなか、火に対応するのは当然夏であり、特に旧暦五月は火の性格を持つ月と見なされていた。遅くとも『淮南子』天文訓に「日夏至則火从之，故五月火正而水漏」（何寧 1998：209）という説が出ている。こうした五行思想のもとに、金属器製造において五月および丙午の日を生産の時期として選ぶ風習が現われた。

中国における出土品を見る限り、銘文のなかに「五月丙午」と刻まれた銅鏡や刀剣類は後漢期に数多く作られたことがわかるが、五月丙午を冶金の吉日とする意識は前漢時代に遡れる。たとえばウェブで公開されている『漢三国西晋鏡銘集成』データベース（林裕己作成）に「永始二年五月丙午、扇上五、工豊造也、景公之象兮、吳娃之兌。作精明鏡兮、好如日月。長相思兮、世不絶。見珠顔、心中驩。常宜子孫。」という鏡銘を有する鏡は4面収録され、番号付けは02101・00381・07351・08509で、いずれも洛陽市に出土したものとされる（林裕己 2018）。「永始二年」とは前漢成帝のBC15年のことで、前漢の最後期にあたる。現在出土した鏡の銘文状況をみれば、「五月丙午」は前漢から魏晋へかけて鏡の鑄造の吉日と見なされていたといえよう。

刀剣の鍛造分野にも同じような時間観念が見られる。よく知られているのは葛洪『抱朴子』登涉篇であり、水中の龍蛇などが退治できる剣を鍛錬する方法について、『金簡記』を引用し、「又金簡記云、以五月丙午日日中、搗五石，下其銅。」（王明 1985：307）と記されている。また葛洪とほぼ同じく東晋時代の虞喜（281—356）も自著『志林』において「古人鑄刀，以五月丙午，取純火精，以協其数。」（徐堅 2004：529）と述べていた。すなわち、古人は刀を作る際、五月丙午の日を選ぶのは、この日は純粹の火の精を意味しているからだった、ということである。

刀剣鍛造の日として丙午を選ぶという意識は中国の出土品のなかにも、裏付けがみつかるといえる。1974年に山東省蒼山県で発見された後漢の環首刀に「永初六年五月丙午／造卅煉大刀／吉羊（祥）宜子孫」という銘文が刻まれており、同環首刀は現在、中国国家博物館に所蔵されているという。「五月丙午」という銘文表現はおよそ三国時代あたりからすこしずつ変容が現れ、「五月五日」「五月十五日」「五月二十五日」など干支のかわりに数字で日付を表す吉日銘文が増えていった。それは冶金吉日意識の変化を意味し、唐時代になって五月五日または端午は鑄鏡の吉日と一般的に認められるようになった。

中国の彫朴は、鍛冶の吉日は初期は五月の丙午に従っていたが、その後、午と五とが混同され、特に五月には必ずしも丙午の日があるとは限らないため、その後、鏡を作る吉日の範囲が拡大し、五月五日や十五日・二十五日も吉日と見られるようになった、とした（彫朴 1979：82）。唐時代に銅鏡のなか、五月五日に鑄造された鏡は重要な一類型であり、皇帝への献上品となるものが多く、特に揚州製のいわゆる「江心鏡」は五月五日に作られることで知られていた。李肇は『唐国史補』でそれについて、「揚州旧貢江心鏡，五月五日揚子江中所鑄也。或言，无有百煉者，或至六、七十煉則已，易破難成。」（李肇 2004：37）と述べていた。（昔、揚州から献上された江心の鏡は、毎年五月五日に揚子江の川中で作られるものである。話によると、百煉とは行かず、六、七十煉ぐらいで済むと言

われる。その理由は、鏡は「煉」の回数が増えると、破れやすく、製造が難しいからである)。ここから、揚子江の江心（川の真ん中）で作られた鏡は「百煉鏡」とも呼ばれたことが分かる。白居易は「百煉鏡・辨皇王鑑也」という詩に、次のように描いている：「江心波上舟中鑄，五月五日日午時。」つまり、江心鏡の鑄造は五月五日の午時という火の要素が最も盛んな時間を選ぶのである。

以上に見る中国の五月丙午あるいは五日を冶金の吉日とする意識は日本に受容されたのであろうか？ 筆者はまず文字資料について、JapanKnowledge および東京大学史料編纂所のデータベースを調べたが、冶金の日柄を特定の日に設定する記載は見当たらない。次に、日本の出土品のなかから丙午の銘を持つものがいくつか確認できた。筆者は『日本列島出土鏡集成』（下垣 2016）『古鏡銘文集成』（三木 1998）および『漢三国西晋鏡銘集成』データベースの三種類の鏡銘資料集を照らし合わせ、そのなかから、丙午の銘文を持ち、しかも日本で出土したと推定できる銅鏡を4面洗い出した（重複は除外した）。4面ともに『日本列島出土鏡集成』に収録されているから、この本に提示された関連情報に基づいて、次の表を作成してみた。

表 日本で出土した丙午銘銅鏡

番号	鏡式	出土遺跡	銘文	面径	時期	舶載鏡 ／倭鏡
『日本列島 出土鏡集成』 山梨 1	赤烏元年対 置式神獸鏡	山梨県鳥居 原狐塚古墳	赤烏元年五月廿五 日丙午 / 造作明鏡 / 百煉青銅 / 服者 君侯 / 宜子孫 / 寿 萬年	12.5cm	古墳時代 中期	舶載鏡
『日本列島 出土鏡集成』 京都 27	景初四年陳 是作盤龍鏡	京都府福知 山市広峯 15 号墳	景初四年五月丙午 之日 / 陳是作鏡 / 吏人銘之 / 位至三 公 / 母人銘之 / 保 子宜孫 / 壽如金石	16.8cm	古墳時代 前期	舶載鏡
『日本列島 出土鏡集成』 宮崎 45	盤龍鏡	宮崎県 持 田古墳群 (推定)	景初四年五月丙午 之日 / 陳是作鏡 / 吏人銘之 / 位至三 公 / 母人銘之，保 子宜孫 / 壽如金石 兮	17.0cm	古墳時代	舶載鏡
『日本列島 出土鏡集成』 兵庫 51	赤烏七年対 置式神獸鏡	兵庫県安倉 高塚古墳	赤烏七年太歳在丙 午時加日中 / 造作 明鏡 百煉幽漳 / 服者富貴 / 長樂未 英 / 子孫番昌 / 可 以昭明	17.0cm	古墳時代	舶載鏡

上の表のなか、安倉高塚古墳で発見した赤烏七年対置式神獸鏡は銘文に出ている丙午表現は「太歳在丙午時加日中」となっており、丙午の日ではなく、丙午の年の意味であるが、同じく冶金の縁起のよい時間と見られ、この年のある日の日中（すなわち午の時）に鏡を鑄造したと考えてよからう。

銅鏡のほか、日本で出土した刀剣類における丙午銘文の実態をも把握する必要がある。この点につ

いて、筆者が寓目した丙午銘を持つ刀剣類は一点のみで、すなわち著名な奈良県東大寺山古墳鉄刀で、銘文は“中平□□（年）五月丙午／造作文（支）刀／百練清剛（鋼）／上応星宿／□□□□（下避不祥）。”である。以上の鏡と刀の丙午銘文の数から見て、丙午吉日意識は古墳時代に日本への伝来と影響はほんのわずかししか見られないといえよう。

平安時代に入って、日本の銅鏡のデザインは凶柄優位の勢いを呈し、銘文の字数が著しく減少し、全く銘文の持たない鏡も稀ではなかった。今まで出土し、あるいは伝世している平安時代の和鏡のなかに、「丙午」銘はほとんど見られない。言い換えれば、古墳時代以降、「丙午」についての冶金学的知識はついに日本社会に根付くことはなかったと言ってもよい。一方、五月五日を吉日とする説が平安時代以降、ある程度受け入れられた痕跡が見つかる。白居易の「百鍊鏡」の詩が日本に伝わり、それを通して五月五日と鏡との関わりが一般的に認識されるようになったようである。JapanKnowledgeと東京大学史料編纂所のデータベースで検索した結果、「五月五日」と「百鍊鏡」あるいは単なる「鏡」とを結び付けた表現は主に和歌・俳諧創作で取り上げられていたことが分かる。平安時代の用例は1例、江戸時代のは3例見つかり、次の通り掲げる。

①「菖蒲ひくみぬまを見ればからくにけふや鏡の影を増らん」

平安時代の歌人源俊賴が五月の風物について詠んだ歌であるが、顕昭は『散木集註』（寿永2年前後に成立）で、この歌の意味を説明する時、「此哥は。楽府百鍊鏡に。五月五日之午時。瓊粉金膏磨瑩也と云文を詠歎」（塙保己一 1993：258）と、白居易「百鍊鏡」からの出典を明らかにした。すなわち、五月五日に沼に生えた菖蒲を刈り、その沼の水面から中国の鏡を連想することを詠んだ歌であるが、両者の媒介となるのは五月五日に作る百鍊鏡である。

②『あだ物語』〔1640年に出版された仮名草子〕上巻

「又五月のかがみは百鍊鏡とて、船中にて鑄たるかがみなり」

③『増山の井』〔1663年に出版された俳諧書〕五月の条に

「さ月の鏡（カカミ）百鍊鑑 揚子江にて端午に銅をよく練ている鏡也」

④『清匏』〔1745年頃に出版された俳諧書〕第一巻

「五月の鏡 百鍊鏡とも 五月五日午の時江南船中にて鑄之鏡也」（『日本国語大辞典』百鍊鏡条）

以上の用例から見て、「五月五日」は百鍊鏡知識の一部として文学で運用され、この知識の影響はほとんど文学に限られているように見える。実際、五月五日に金属器を作ることは史料上たった一件しか見られない。それは『十三代要略』巻2の大治四年五月条に「五月五日。壬午々之時。本院被鑄御護劍。」<sup>(4)</sup>という記録である。「本院」とは白河法皇のことを指し、御護劍を作る日付は大治四年五月五日、干支では壬午、時間は午時を選んだという。この白河法皇の鑄劍について、『百鍊抄』には「五月五日。午剋。法皇被鑄御護劍五。午日午剋支干相生之故也。」（黒板 1965：57）と説明が付いている。「午日」と「午剋」は干支の性格が合い、劍を作る時間としてふさわしいということである。このように、平安時代以降、五月五日説は文学の分野に入り、鏡に関する修辞学的用語として和歌・俳句などに用いられていたが、冶金業の生産活動との関係を立証することは難しい。丙午はおおよそ近世初頭に女性の不吉な生まれ年という迷信に生まれ変わり（小林 1941）、金属業とは完全に異質の

ものとなった。これは中近世の冶金業者が五月五日吉日の知識を受け入れず、一陽来復の思想を選んだのだと解釈できよう。

## むすびに

以上、韃祭りの形成過程に関わる諸文化要素を分析することによって、韃祭りの形成は複数の文化要素が融合する過程であり、また文化選択の過程でもあることが分かる。中世の小鍛冶神話によって、韃祭りの神話的基礎が用意され、京都で広く行われた冬の火焼によって儀式的な基礎が整えられた。火焼自体は宮中の鎮魂祭の民間化の結果として生まれたものであり、いきおい鎮魂祭の深層に潜んだ天岩戸神話に関わってくる。一方、火焼は旧暦 11 月に行われていたことをきっかけに、中国の一陽来復の意識が付与された。火焼が韃祭りに変身していくとともに、一陽来復説は、韃祭りの成立の根拠ともなった。一方、中国冶金業の時間的な慣行は本来、丙午と五月五日を吉日とし、それも五行の火の観念に基づいたものであり、この吉日知識も日本に伝わったが、鍛冶の分野における影響は限定的だと言わざるをえない。

日本の金属業に取り入れられた一陽来復説は神道の諸要素と融合し、それによって、金属生産の営みが宇宙の運行とつながる形で捉えられるようになった。つまり、一陽来復説に含まれた暗黒や困難に怖れず、めげず、希望の火がいつまでも燃え続けるという前向きな価値観も、金属生産と韃祭りに流れ込み、生産の順調や商売繁盛という素朴な生活意識はそれによって哲学的根拠を得ることができた、とあってよいであろう。韃祭りはこのように一見ごく単純な金属業の祭祀であるが、そのなかに人々の素朴な心理や神話・儀礼・哲学・技術という様々な側面が含まれ、さらには国際文化交流や選別の結実として生まれたことを併せて考えると、改めてこの祭りの面白さに気付かれるのであろう。

## 註

(1) 「夥しや」のふりがな「おびた夕」は原文にある表記である。

(2)  は梵字の「マン」である。

(3) 伏見稲荷大社の HP では「火焚祭」の表記が用いられている。

<http://inari.jp/rite/?month=11%E6%9C%88#394> 最終閲覧 2021.1.15

(4) 『十三代要略』は村上から崇徳天皇の 13 代の間の出来事を編年に記述した年代記であり、1141 年以後に成立したものと見られる。『十三代要略』(二)『続群書類従』第二十九輯上、雑部 p.381。JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=91021V580387> 最終閲覧 2021.1.15

## 引用・参考文献

### 日本語

石井倫子 2002 「〈小鍛冶〉の周辺」『日本女子大学紀要』文学部 52 : 1-12

川口久雄校注 1966 『菅家文草 菅家後集』(『日本古典文学大系』第 72 巻)、東京：岩波書店

北原保雄 2001 『日本国語大辞典』第 2 版、百鍊鏡条、JapanKnowledge<<https://japanknowledge.com/lib/display/?>

- id=20020394b922nvurqJ6D> 最終閲覧 2021.1.15
- 北野博美 1928 「盆踊と左義長」『民族芸術』1 (8) : 21
- 小林胖生 1941 「丙午迷信の発生と伝播」『民族学研究』7(2) : 232-277
- 小島憲之ほか 校註・訳 1998 『日本書記』第3巻 (『新編日本古典文学全集』第4巻)、東京 : 小学館
- 近藤喜博 1963 『古代信仰研究——稻荷信仰論』東京 : 角川書店
- 黒田迪子 2015 「ふいご祭りの伝承とその重層性について—祭日・祭神・供物を中心に—」『國學院雑誌』116 (8) : 15-47
- 黒板勝美 1965 『日本紀略・百鍊抄』『国史大系』第11巻、東京 : 吉川弘文館
- 黒川道祐『日次紀事』(萩原龍夫、山路興造編 1984 『日本庶民生活史料集成』第23巻)、東京 : 三一書房
- 松江重頼 1971 (第2刷) 『毛吹草』東京 : 岩波書店
- 三木太郎 1998 『古鏡銘文集成 : 日本古代史研究要覧』東京 : 新人物往来社
- 坂内直頼「山城四季物語」(早川純三郎編 1936 『民間風俗年中行事』) 東京 : 国書刊行会
- 下垣仁志 2016 『日本列島出土鏡集成』東京 : 同成社
- 蘭田稔、橋本政宣編 2004 『神道史大辞典』「神楽」条、東京 : 吉川弘文館
- 平信範『兵範記』(三) (笹川種郎編 1936 『史料大成』第17巻) 東京 : 内外書籍
- 寺島慶一 2001 「ふいご祭りの来歴小考」日本鉄鋼協会報誌『ふえらむ』6 (11) : 878-885
- 上田正昭 佐伯秀夫校注 1989 『石上・大神』(『神道大系』神社篇第12巻)、東京 : 神道大系編纂会
- 柳田国男 1969 『柳田国男集』第13巻、東京 : 筑摩書房
- 横道万里雄・表章 校注 1972 『謡曲集』(下) (『日本古典文学大系』第41巻)、東京 : 岩波書店
- 吉野裕 1971 「稻荷信仰溯源」『文学』39 (11) : 96-105、東京 : 岩波書店

## 中国語

- 何寧 1998 『淮南子集釈』中華書局
- 李肇 2004 『唐国史補』北京中電電子出版社
- 彪朴 1979 「“五月丙午”与“正月丁亥”」『文物』1979 (6) : 83-86
- 王明 1985 『抱朴子内篇校釈』中華書局
- 徐堅 2004 『初学記』(下) 中華書局

## ウェブ資料

- 朝倉治彦校注 1990 『人倫訓蒙図彙』巻6 : 205、東京 : 東洋文庫、JapanKnowledge <<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=80010V0519P0107&scale=0.41961&top=0px&left=271px&angle=0&mode=0>> 最終閲覧 2021.1.15
- 林裕己 2018 『漢三國西晉鏡銘集成』データベース 横浜ユーラシア文化館ウェブサイト <[http://www.eurasiacity.yokohama.jp/database/kyomeishusei\\_03.pdf](http://www.eurasiacity.yokohama.jp/database/kyomeishusei_03.pdf)> 最終閲覧 2021.1.15
- 一条兼冬「世諺問答」塙保己一 1991 『群書類従』第二十八輯雑部、東京 : 続群書類従完成会、JapanKnowledge <<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=91011V280690>> 最終閲覧 2021.1.15
- 顕昭『散木集註』『群書類従』第十六輯和歌部、JapanKnowledge <<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=91011V160264>> 最終閲覧 2021.1.15
- 北村季吟編 1816 『細訂増続誹諧山乃井』(坤) 京都 : 花屋旧次郎出版、法政大学図書館正岡子規文庫 <[https://archive.library.hosei.ac.jp/db/default/detail/911-3\\_51\\_2](https://archive.library.hosei.ac.jp/db/default/detail/911-3_51_2)> 最終閲覧 2021.1.15
- 『十三代要略』(二) 『続群書類従』第二十九輯上、雑部、JapanKnowledge <<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=91021V580387>> 最終閲覧 2021.1.15
- 『日本国語大辞典』百鍊鏡条、JapanKnowledge <<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=20^#020394b922nvur>

qJ6D> 最終閲覧 2021.1.15

坂内直頼 出版年不明『本朝諸社一覧』巻3:43、早稲田大学図書館ウェブサイト <[https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko31/bunko31\\_e1150/bunko31\\_e1150\\_p0045.jpg](https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko31/bunko31_e1150/bunko31_e1150_p0045.jpg)> 最終閲覧 2021.1.15

東京大学史料編纂所データベース <<https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>> 最終閲覧 2021.1.15